

## 長期宿泊体験活動検討委員会 第3回 議事要旨

- 日 時：令和2年6月18日（木）午後3時～午後4時45分
- 場 所：教育委員会室
- 参加者：委員長、委員12名、事務局3名 計16名

### 1 開会

- ・資料の確認

### 2 委員自己紹介

- ・新規任命委員挨拶

※令和2年4月1日付人事異動により委員の交代があった。

区分	氏名	任期
指導課長	秋山 美栄子	令和元年12月20日から令和2年3月31日
指導課長	村松 良臣	令和2年4月1日から令和3年3月31日

### 3 議事

(委員長)

- ・今年はセカンドスクールがないということにすごく衝撃を受けた。今年行けなかった子どもたちが中学校でセカンドスクールに行けるとというのが、せめてもの救いで、よかったと思う。今回の中止をきっかけに、この検討委員会でセカンドスクールをよりよいものにしたという気持ちがさらに強くなった。
- ・まず初めに、前回の検討委員会で検討した小学校プレセカンドスクールについて確認したい。

(事務局)

- ・資料「第2回までの検討委員会で出されたプレセカンドスクールについて」の説明

(委員長)

- ・小学校プレセカンドスクールについて資料に目を通して、何か質問等あればいただきたい。

(副委員長)

- ・武蔵野市では、青少協と共催で実施しているジャンボリーもプレセカンドスクールと同様に4年生で参加することができる。ジャンボリーの担い手確保も厳しくなっている。学校教育計画の中でも、学校や地域全体が協力し合って育てていきたいと書いてある。プレセカンドスクールなのかジャンボリーなのか分からないが、どちらかが初めての宿泊学習の場となり得るのか。また、このふたつは同じ目的をもつものなのか、それとも全く違うものなのか、それぞれに必要なのか、皆様のご意見をいただきたい。

(委員長)

- ・ただ今お話のあったジャンボリーとプレセカンドスクールの目的や活動内容等について、皆様からの意見をいただきたい。

(委員A)

- ・子どもをセカンドスクール、プレセカンドスクールに行かせている。ジャンボリーも青少協として、連れていく立場で参加している。
- ・親としては、ジャンボリーとプレセカンドスクールでいうと、ジャンボリーを先に行く学校が多いので、ジャンボリーで泊りの準備ができるかどうか様子を見て、プレセカンドスクールに行かせるという感覚がある。しかし、青少協でジャンボリーを連れていく側としては、まったく別物と考えていただきたい。行かせる保護者の方たちがよく「ジャンボリーはキャンプだから」というが、ジャンボリーとキャンプもまた違うもの。ジャンボリーは、武蔵野市独自のもので地域でやるものであり、縦で行動することが多い。ジャンボリーは4年生、5年生、6年生、中学生、地域の方と一緒に縦で行動する。プレセカンドスクールは4年生という学年で行くものなので、泊りの準備をするだとか、自分のものは自分で片づけるという生活面でのスタートという意味では一緒かもしれない。ただ、プレセカンドスクールは学習として行くものだが、ジャンボリーはまた違った意味があり、異なる経験をする。一緒にしてしまうのは違うと思う。

(委員B)

- ・プレセカンドスクールとジャンボリーが異なるものという意見は、その通りだと思う。プレセカンドスクールは、授業として行っている。私の学校の場合、ジャンボリーの参加率は割と低いかもしれない。そういった意味では、「ジャンボリーに行っているはずだから」という話にはならないので、やはり学校としては、ジャンボリー参加を前提とするのは危険かなという気がする。

(委員C)

- ・ジャンボリーもプレセカンドスクールも5、6回参加しているが、やはり別物だと感じている。ジャンボリーは違った学年と行くものだが、プレセカンドスクールは同じ学年で行くものである。私自身としても、ジャンボリーに参加するときと、プレセカンドスクールで子どもたちを連れていくときでは、スタンスがだいぶ違う。ジャンボリーでは、青少協や地域の方が中心となるので、教員は一步引いて子どもたちを少し遠くから危険がないか見守る立場でいる。

(委員B)

- ・資料3「第2回までの検討委員会が出されたプレセカンドスクールについて」の③検討課題のところに入っていないので、確認をしたい。
- ・②にあるように学習指導要領が新しくなるということで、何の時間でとっていくのかを、プレセカンドスクールとセカンドスクール共に考える必要がある。
- ・プレセカンドスクールとセカンドスクールで、どの授業でとっていくかという扱いが違って私はいいと思うが、改めて検討する必要がある。

(委員長)

- ・小学校5年生の在り方を踏まえて、その前の段階の小学校4年生のプレセカンドスクールに必要なこと、また、次の段階になる中学校1年生のセカンドスクールで必要なことを考えていきたい。
- ・小学校セカンドスクールについて、4泊、5泊にした場合のプログラム案を作成してもらった。本来のセカンドスクールのねらいを達成しつつどう実施すればよいか、4泊、

5泊に短くした場合、ねらいは変わってくるのか。プログラム案を作成してみて課題や感じたことについて説明していただきたい。

(委員D)

- ・4泊5日バージョンと5泊6日バージョンの両方を考えてきた。今回作成するにあたり、セカンドスクールの要綱にある目的と武蔵野市民科の目指す資質・能力を軸にして考えた。
- ・毎回セカンドスクールではテーマを設けている。テーマから遠い活動を外していくことで、極論を言うと、いくらでも短くなる。日光移動教室は2泊3日なので、そのくらいまでならセカンドスクールも短くできると思う。今はインターネットが発達していて、帰ってから学習をすることもできる。ただ体験して初めて分かることもあると思う。どうせ分かるだろうとか、何回もやるからいいだろうというので減らしてしまうと、子どもたちの実感がなくなってしまうことがあるので、どこまで減らすべきなのかというのは検討すべき。
- ・セカンドスクールの目的は、人間関係や子どもの自主性・自律性を育てること、現地の方との交流、周囲の人と「協働」することがある。そういったことを考えたときに、どれだけの期間でこの目的が達成できるのかを考える必要がある。そこで、戸狩の宿にアンケートを取ってみた。(以下アンケート結果)
  - ①宿の方と子どもたちの距離はどのくらいで縮まるのか。  
→3日目という結果が多かった。そのあたりから距離感が縮まったと感じているようである。
  - ②子どもたち同士の間関係が深まったのはいつからか。  
→5日目という感想が多かった。様々な出来事の後には仲が深まるので、そのくらいの時間は必要。
  - ③子どもたちの自主性が高まったのはいつからか。  
→子どもたちの自主性の一つ目のピークは1日目だった。二つ目は、4日目あたり。初日の気遣いがいったん崩れて、4日目くらいから周りがみえるようになって、自分でやらなければならないことなどが分かってくる。
- ・後者の目的を達成するためには、アンケート結果をふまえれば、現在と同程度の泊数が必要と考える。

(委員C)

- ・4年生を担当しているが、プレセカンドスクールが今年はなくなってしまったので、子どもたちが残念そうにしていた。
- ・私の学校では武蔵野市民科との関連だと、「協働」を観点として、セカンドスクールを行っている。
- ・自然観察が多かったのを減らしたり、郷土食作りが2回あったのを1回にして圧縮しても、育成を目指す資質・能力をもちこむことはできるが、より深い人間関係の形成については一定の泊数が必要である。
- ・学生時代、他の自治体ではあるが、5泊6日の宿泊行事の指導員をしていた。子どもは指導員との関係で学ぶ部分も多い。普段関わらない大人との交流で成長する部分も大きい。今の泊数が妥当ではないかと思う。

(委員B)

- ・セカンドスクールにおいては、武蔵野市民科の探究的な学習を重視したいと考えてい

る。今までは事前に調べておいて、現地で体験していた。用意した体験が多かったので、探究とは言えないかもしれない。

- ・探究の第一段階をセカンドスクールで直接体験することにして、あとからスカイプやZoom等のツールを用いながら、気になることを調べてもいい。
- ・価値のない活動はひとつもないが、減らすことはできる。
- ・歩いて行ける範囲には限界があるが、マイクロバスを使えば、飯山市内にインタビューなど取材に行くこともできるので、現地で学びが行動的になる。
- ・稲刈りなら社会科として、星の観察であれば理科という形で、精査をしつつ教科として見直すことができる。セカンドスクールの7日間で総合的な学習の時間を30時間取られているので、セカンドスクールの在り方を考える必要がある。
- ・私たち大人は宿泊に行くとハイキングしないといけないと思っているが、現地では毎日ハイキングみたいなものなので、武蔵野市民科との関連を考えると、必ずしも（活動として）ハイキングを入れる必要はないと思う。

#### (委員E)

- ・セカンドスクールのねらいとして、自然体験や現地ならではの生活を体験することがある。それらの体験により、ファーストスクールの武蔵野のよさに気付くことができる。そういった意味で、生活に密着した体験を重視していきたい。
- ・どれも捨てがたいが、削るとしたら東京でもできること。これまでは、学んだことを現地で体験していたが、最初に現地で凝縮した体験をして、一番印象に残ったことを帰ってから調べるのもいいのではないか。
- ・活動と活動の間の時間が大事。そうした時間の中で、どれだけ家族に大切にされているか気づく。
- ・知識先行だと現地での感動が薄れてしまうので、課題別学習は後からやってもいいと思う。

#### (委員長)

- ・様々な意見がでて、聞いていて参考になり、学ぶところが多かった。それぞれ各活動の目的や宿の方へのアンケート、自らの体験から導き出されたものであり説得力があった。出てきた意見について、質問や感じたことがあればいただきたい。

#### (副委員長)

- ・以前指導員をやったことがある。そして、就職してすぐに4泊5日のキャンプを作った。宿泊期間中、課題が出てくるがそれを乗り越えて新しい関係をつくるのが重要だと感じた。
- ・4泊5日あるいは5泊6日の中で、山を越えればセカンドスクールの目的は達成できるのか。それとも、山を越えた後の時間も必要なのか。
- ・他の委員が言っていたように、合間の時間に子どもたちが何をするのかというのも大切。

#### (委員F)

- ・今まで6泊7日だったのが、4泊5日や5泊6日に短くなることで、子どもたちが時間時間で追いつめられるようにならないか心配。先生方も充実した活動をさせたいと思うと活動を詰め込みがちになる。有難いことだが、余裕も必要。
- ・自粛期間中、子どもたちと3人で過ごす時間がたくさんあった。その時は、すごく心に余裕があり、周りをみられて、とても穏やかだった。心の成長を考えると、周りをみら

れるような時間が必要だと思う。

- ・保護者としては、4泊5日より5泊6日で帰ってきたときの顔が見たいと思った。

(委員A)

- ・4泊と5泊だとだいぶ差があると思う。ジャンボリーは2泊3日。その中で、あの子はこれはやらない。私はこんなに頑張ってるのにとか、不満が出てくる。だけど、3日だと、子どもたちはどうにか我慢して帰ってくる。だから、セカンドスクールのようにおとうちゃんおかあちゃんと離れたくないって泣けるような感動はない。3泊、4泊と長くいることで信頼関係が築ける。
- ・様々な学年がある。お友達と喧嘩して早く別れたかったっていう学年も、行く前はあんなに仲が悪かったのに、帰ってくる頃にはすごい仲良くなってずっと友達ということもある。どちらにしても考え方が変わるという意味で泊数は大事だと思う。
- ・時間がないと事故が起こるし、時間と時間の間が大事。以前ジャンボリーで雨が降って、予定の活動が全然やれなかった時があった。その時は、何もできなくて申し訳ないと思ったが、無かったら無かったで、子どもたちは考えて過ごしていた。慌ただしくなったり、心に余裕がなくなるのであれば、泊数に余裕を持った形で考えてほしい。

(委員G)

- ・中学校は4泊である。小学校のように泊数が長くなると余計に指導員が見つからなくなると思うが、そのところはどうか。
- ・指導員の質は大事。特に小学校は民泊なので指導員との関係が大事。

(委員E)

- ・指導員は本当に大切。確かに確保は大変で、年が開けたらすぐ電話をかけて指導員探しをしている。ただ、セカンドスクールの価値を感じて、来年もまたやりたいたいと言える学生もいる。
- ・大学の教授にお願いをして、毎年何人か指導員を紹介してもらっている。一つの学校の一人の先生にお願いすると、指導員同士のつながりが深すぎて、指導員同士のキャンプみたいになってしまうので、複数の学校にお願いしている。
- ・教育委員会で作っている指導員の名簿もあるが、それを見て連絡しても、もう卒業してしまっていることもある。

(委員D)

- ・これまで特別に配慮している場合以外は、各宿1人ずつ指導員がついていた。そうすると、2日目3日目あたりになると、うまくいなくて悩む指導員が出てくる。それが昨年から、各宿2人体制になった。そうすると、指導員同士で話し合ったり、一人がみているときに休んだりできるから悩みも減ったように思う。
- ・事前に面談をして、指導員の様子を見ながら誰をどこの宿に配置するか決めている。

(委員E)

- ・昨年からは指導員が各宿2人ずつになったので、体制としては良くなったが、さらに指導員探しが大変になった。

(委員B)

- ・指導員は、人数を集めるだけでも大変で、選ぶことはなかなか難しい。多少心配でも行

かせるしかない。指導員の確保は厳しい状況にある。持続可能性という点は、指導員についても課題。

- ・当日熱が出て欠員が出たとしても、それを埋める人はいないので、一人足りない状態で行くしかない。

(委員F)

- ・セカンドスクールについて、先生方がこんなに全部考えて決めていると思わなかった。
- ・(指導員の確保について) 教育委員会から東京中の全部の学校に声をかけるくらいの感じで、バックアップがあると思っていた。

(委員H)

- ・指導員リストがあり、また大学などに声をかけてもいる。ただ、横や縦の指導員のつながりで紹介してもらうことが多い。自分は就職しているが、後輩を紹介します、だとかそういったつながりが大事。

(委員I)

- ・これまで指導員を経験したことがある人の紹介もあるが、専用のメールアドレスを作ってチラシに載せて募集をしている。
- ・大学に行ってお願いをしたり、チラシを配ったりしてなるべく裾野を広げて、募集を募るようにしている。

(委員E)

- ・指導員は誰でもいいというものではないので、しっかりみて信頼のおける方に紹介してもらうことがすごく重要だと思う。

(委員長)

- ・実際のところ、いきなり6泊7日で行って、きつくなる指導員がいるのも当たり前だと思う。心配なときは、期間中に活動内容の状況を見て、全員の指導員同士が話し合える時間を一定時間取ってあげることをしたこともあった。指導員も活動していく中で育っていく。
- ・2人体制だと、何かと相談できるのでよいと思う。

(委員J)

- ・これまで先生がやってきた指導員や業者とのやりとりをするような専門の職員を設けることはできるのか。もし可能であれば、教員負担は減ると思う。

(副委員長)

- ・成人式で全員に指導員募集のチラシを配っているが、効果が薄い。
- ・過去にやった方だとか、直接のつながりが一番大事で、東京都の人材バンクもあるが思うようにいかない。教育委員会としてできるだけのことをやりたい思いはあるが、意欲のある人を集めることの難しさはある。

(委員H)

- ・2泊3日であれば、ある程度人数を確保できる。
- ・自分自身も副校長として関わってきたが、セカンドスクールのよさというのは、学校や

教員が自身でテーマを決め、自分の学校の子どもたちに何を体験させたいか考えて、実現させるというのが醍醐味であり、よさだと思う。財政面やバスの手配などの手続きは、事務局が受け持つようにしている。事務局と学校で手続きについて住み分けながら、学校がやりたいことを実現している。これを事務局が主導となってやれば学校も楽だと思うが、そのときの効果というのは今までよりも薄れてしまうと思う。

(委員J)

- ・今回の検討委員会に向けて、周りの保護者に意見を聞いてみた。日程を短くしてほしいという意見が大半だった。一方で先生も大変だと思うので、日程はそのままで、教員負担を減らしてほしい。

(委員長) 説明

- ・指導員の確保については、検討委員会の課題としていく。
  - (1) 宿泊体験活動の計画・実施に当たっての留意事項等
  - (2) 武蔵野市立小中学校セカンドスクールと令和2年度武蔵野市教育委員会基本方針との関連等
- ・小学校5年生のセカンドスクールについて様々な意見がでた。
- ・改めて活動を見直し、通常の学校生活では行うことのできない教育活動を重点的に行っていきたい。
- ・これからのセカンドスクールでは、よりよい人間関係を形成する態度を養うなどの活動をプログラムにどう組み込んでいくかも重要な視点の一つになってくる。
- ・教科に関わる学習を設定し、授業時数に含めて行っていきたい。
- ・今、話し合われていることが、これからの長期宿泊活動の基本方針の方向性につながってくる。
- ・自分たちでルールを作ったり、自分たちで話し合ったりして解決したりできるような時間を（セカンドスクールの中で）作りたい。

4 事務連絡

- ・日程調整
- ・次回について